

特 集

蛭川幹夫教授定年退職記念号によせて

栗田 る み 子

1. はじめに

2020年3月末をもって蛭川幹夫先生が、城西大学経営学部をご退職されることになりました。

蛭川先生は、市立高崎経済大学（経済学部経済学科）を卒業され、その後27年間、埼玉県高等学校商業科教員を務められました。1997年からは城西大学経済学部講師、2004年に経営学部助教授、更に2008年に教授に昇格され、今日に至っています。在職された25年の間には、経営学部副学部長、教職センター長、会計教育委員長という要職を務められ、本学の発展に大いに貢献されました。

特に、教育面においては、城西大学に就任された初年度から、教職教育と会計教育に熱心に取り組まれ、多くの商業科教員を輩出してくださり、「城西に蛭川あり！」とされています。

2. 出合い

私が蛭川先生と一緒に仕事をさせて頂いたのは、埼玉県立深谷高校の専攻科でした。私は専攻科の情報コースの「アプリケーション開発」の授業を担当するために非常勤講師として在職しておりました。専攻科は、1994年（平成6年）に別名スーパー・カレッジと称する全国唯一の会計と情報の専門家を育成することを目標とし設立された県立の専門学校です。会計コース担当の蛭川先生と情報コース担当の久保田克之先生は、専攻科の設立に向け日々奮闘されたとお聞きしています。

専攻科では、先進的な知識と技術を持つ社会人

講師を採用しており、講師一人ひとりの個性を最大限に生かし、工夫を凝らしたカリキュラムとなっており、ぎっしり詰まった授業の中でも、ワクワクと教壇に立たせて頂いたことを鮮明に覚えています。例えば、休み時間になると職員室に生徒がやってきて、教員の好みのお茶を入れてくれます。私の場合「栗田先生＝猫舌、日本茶濃いめ」と給湯室の壁に貼ってあるようでした。そしてしばらく雑談を交わすのです。また、教壇には、生徒の自宅の庭さきに咲く花を飾ってくれたりします。これらもいくつかある蛭川マインドの1つでした。そしてこのような精神を城西大学に持ち込んでくださったのです。

3. 教育研究活動

城西大学で長年取り組まれてきたのが、「簿記塾」です。これは、大学の会計教育研究のなかに、独自のポリシーを込めて会計指導法を打ち立てたものです。

「簿記塾」の指導法と組織化はそのスタイルに特徴があり、アクティブラーニングの要素である、グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーションを取り入れてあり、学生たちに歴代受け継がれています。

簿記塾の学びの特徴は「相互評価学習法」と言えます。レベルにあった小集団チームの集合体が1クラスという学習コミュニティとして成立しており、チーム同士が学習した成果を互いに共有することで、簿記塾全体の学習コミュニティとして成立しているのです。これは、他チームの成果が

チーム活動だけでは気づかなかった知見をお互いに与えてくれる仕組みです。これらの蛭川先生の多様な指導法や社会人マナーは、学生たちの学びの場をひろげることができています。

また、2011年度には、簿記塾の活動を社会人基礎力の一環として考え、学生が発表した社会人基礎力グランプリ関東大会（経済産業省後援）で、チームで働く力（チームワーク）の高さが評価され、奨励賞をとることができました。社会人基礎力協議会の委員を担当する私としては、誇らしく大変うれしい出来事でした。

研究分野で一緒にさせて頂いたのは、専攻科の設立と教育方針をまとめた報告書の作成でした。専攻科の高度な専門教育と人間性を高めるカリキュラム設計をまとめたものです⁽¹⁾。

同様に会計学習の指導法の実践研究論文では、会計教育の背景と学習者のモチベーションについてまとめました。商業高校からの進学者数の増加にともない、簿記の既修者の増加が目立つ一方、簿記嫌いの学生が増加し、その指導法は一層困難なものとなっています。このような背景において、大学の簿記教育はどのようにあるべきか、望ましいカリキュラム、指導内容、指導形態等について考察しました⁽²⁾。

蛭川先生のご活躍は研究や教育面に加えて地域貢献でも大いに活躍されており、その評判の高さに驚かされます。

社会貢献活動としては、長年にわたり埼玉県商工会議所が主催する簿記講座をご担当されてきました。「わかりやすく、面白い」との高い評判から、埼玉県トラック協会や埼玉県建設業協会などからの依頼で開催される簿記講座は常に満席と伺っています。このような活動は埼玉県にとどまらず、札幌商工会議所、名古屋商工会議所、大阪商工会議所など全国を飛び回り「簿記検定の効果的指導法」に関するご講演をなさっています。

このような活動の成果として、簿記学習の初心

者が日商簿記1級を取得する等喜ばしい逸話を多く耳にしています。私も「さっぱり簿記のわからない人のための講座」にこっそり参加したとき、ストーンと腑に落ちる説明が面白かった事を思い出します。

このような活動に加え会計分野の教科書の執筆や、取りまとめ役を引き受けられ広く活躍されました。こうした大学外との交わりを通じて、自身の会計教育指導の研究の幅を広げてこられたのです。

4. おわりに

蛭川先生が長年進めてこられた会計教育は、専攻科の時代から進められたスペシャリスト指向の会計教育と、城西大学で取り組まれた経営学部の教育の一環としての会計教育、そして広く、職業会計人育成の会計教育の3点であったといえます。

蛭川先生のご退職されることは、私たち教職に関わる城西大学の教職員や学生全員にとってたいへん残念なことですが、これまで先生が築いてこられた未来のための礎と、数々のご恩に対して、心から感謝の意をこめて、この特集号を先生に捧げます。

(1) 蛭川幹夫、栗田るみ子、久保田克之（2003）。「専攻科の将来像－地域社会への知的財産の還元－」『商業教育論集』第13集

(2) 栗田るみ子、木内正光、蛭川幹夫、草野素雄（2007）。「フィジカルマネジメントによるヒューマンスキルの育成第二報－経営シミュレーション演習による教育効果－」日本教育工学会第23回全国大会，2007年9月24日，（早稲田大学所沢キャンパス）